

ワークキャンプで気づいたこと

兵庫県立神戸高等学校

2年 鈴木 香苗

「鈴木さんが今日最終日だから、頑張って来ました。」

一人の利用者さんからかけていただいた言葉だ。無理をしないでほしいと思う気持ちもあったが、それ以上にとっても嬉しく、心がぼかぼかと温くなった。

私の将来の夢は、特別支援学校の先生になることだ。母が知的障害などを持つ方の通所施設に勤務していることや小学校の時に支援学級に在籍する生徒と交流したことがきっかけで興味を持ち、教育というアプローチで障がいを持つ子供と関わりたいと思い、この夢を目指している。高校生の間に将来に向けた経験を積みたいと考え、今回のワークキャンプで障がい者施設を希望し、精神障害や知的障害などを抱える方と三日間関わった。

お世話になった施設は、精神障害を抱える方が多く通所し、お弁当作りや歯ブラシのキャップつけなどの軽作業を行う作業所だった。私は、この体験に行くまで、障害についてぼんやりとした知識しかなく、精神障害と聞くとニュースなどから少し怖いイメージもあったため、初日は施設に向かうまで不安と緊張でいっぱいだった。作業開始前に、施設の方から、ほとんどの精神障害は普通に暮らしている中で発症し、ここに来ている方は薬で症状を抑えながら、各自ができる作業を行っていると教えていただいた。緊張が少しほぐれ、ほっとしたと同時に、自分自身が障害という強い枠組みに囚われすぎていたと感じた。

実際に利用者さんと歯ブラシのキャップ付けや検品を行った。利用者さんから作業の手順を一から丁寧に教えていただきながら仕事を行った。どの利用者さんもとても優しく、「何か困ったことがあったらいつでも聞いてくださいね。」「高校生なんですね。将来こういう職業に就きたいんですか。」などと私に声をかけてくださった。そんな優しく、個性溢れる利用者さんはたわいもない会話をしながら互いに協力して作業をしており、作業部屋は「ありがとうございます。」という言葉が飛び交う、あたたかい雰囲気だった。この部屋であつたたくさんの出来事から、利用者さんのきらきらとした面をたくさん見ることができ、私の心が何度も和んだ。

主に精神障害を抱える方が歯ブラシの作業を行っていたが、知的障害を抱える方も同じ部屋にいらっしやつた。この方のお仕事は作業途中に床に落ちたキャップを拾うことや外部へのお弁当配達、材料の買い出しで、それ以外の時間はいつも笑顔で同じような言葉を繰り返して話されていた。この方がキャップ拾いの仕事をされた時、どんな時でも他の多くの利用者さんが「ありがとう〇〇さん」と伝えていた。また常に同じことを話されていても誰も否定することはなく、むしろその発する言葉に反応や質問を返していた。人それぞれの個性を認め、尊重すること。当たり前行動ではあるが、その大切さを改めて実感した。利用者さんの才能が溢れていた瞬間にも出会った。何人かの方が自作の絵を見せてくださったり、ハーモニカの演奏を披露してくださった。可愛らしい似顔絵やキャラクターの絵、独特な世界観の幾何学模様、素敵な演奏を見たり、聞かせていただいた。障害を持った人の中で絵や音楽に長けている人がいると聞いたことはあったが、実際にその才能を目の当たりにしたのは初めてだった。こんな才能を持った方がたくさんいらっしやることに驚き、もっと世の中にこんな人がいるということを知って欲しいと思った。

できないことがあれば、お互いで助け合い、困っている人がいたら自ら進んで助けに行く。小さなことでも良いことがあつた時には、みんなで認め、褒め合う。そんな普通の人でも自然に行うことが難しい行動を、利用者さんが当たり前のように行っていた姿が三日間で最も印象に残った。日常生活を過ごしていると、ついつい自分のことに精一杯になり、周りが見えなくなってしまう。だからこそ、利用者さんが常に周りに気を配り、優しさ溢れる行動をされている姿に感動し、世の中の多くの人に障害を持つ方の様々な面について知って欲しいと思った。また、今回ワークキャンプに参加していなければ、こんな素敵な方がたくさんいらっしやることを知る機会がなかった。普段から色々なことに興味を持ち、機会があればなんでも挑戦する姿勢を忘れないようにし、夢に向かって努力していきたい。